

平成7年度 修復処置概報

修復技術部

1. 金属文化財の保存修復

重要文化財群馬県高崎市観音山古墳出土金銅製品、重要文化財和歌山市大谷古墳出土金属製品等の修復処置を実施した。大谷古墳出土の遺物については、馬面や馬甲などの馬具を中心にして修復を行った。特に馬甲の詳細な記録を作成しているので、それをもとに考古学的な考察を行い模造製作を試みる予定でいる。(青木繁夫・犬竹 和)

2. 出土木製品の保存修復

浜松市梶子北遺跡から出土した木簡、絵馬などの保存修復処置を行った。処置は、PEG4000を60%まで含浸したあと真空凍結乾燥を行った。従来、真空凍結乾燥機は乾燥庫内の湿度を調整しながら乾燥処理を行うことができないために細かな亀裂が発生するなど、保存処理上問題があった。これらの問題を改良する研究を行ってきたが、実験の結果、乾燥庫内の湿度を調節することが出来るならば改良可能なことが分かり、乾燥庫内の湿度調整ができる真空凍結乾燥機を製作した。この遺物(針葉樹)は湿度約60%に調節された乾燥庫内で真空凍結乾燥処理が行われた。処理の結果は、満足すべきものであったが、今後、広葉樹や漆製品への応用に向けて実験を進めていく予定である。(青木繁夫)

千葉県館山市大寺山洞穴遺跡の発掘調査が千葉大学考古学研究室によって行われた。乾燥した砂質土壌中から古墳時代の舟形木棺が発掘され、そのほかに土師器、須恵器、管玉、甲冑等の遺物が発見された。木棺は乾燥した砂質土壌中に埋蔵されていたため、エジプト等の乾燥地帯で発見された木製品のように蒸れ腐れの状態で発掘された。日本において、このような埋蔵環境で発掘される例は、極めて珍しく貴重な物である。遺物を大気に曝すとその中に含まれているわずかな量の水分が急激に蒸発して崩壊してしまうため、保存処理は発掘現場で行った。木棺を強化するためにポリシロキサン樹脂(商品名ピフォロン)を浸透させ強化した。ポリシロキサン樹脂が硬化後、感圧性接着剤を木棺表面にスプレーで塗布したあと、ガラス繊維を貼って構造的強度をもたせ取り上げた。(青木繁夫)

3. 遺跡・遺構の保存修復

史跡千葉市加曾利貝塚には貝層断面が覆屋の中で保存展示されている。この貝層断面が保存処理されて約30年程が経過したため、樹脂の劣化などで混土貝層やローム層が崩壊してきたため、ポリシロキサン樹脂を含浸して強化した。(青木繁夫)

東京都指定史跡三鷹市出山横穴墓群8号墓の保存処置及び公開施設建設。公開施設については古墳内の湿度保持方法、見学窓の結露防止対策などを検討し設計に反映した。横穴墓には積極的な保存処理を行わない予定であるが、公開後の経年変化を知るための基礎資料としてローム層の土壌含水比、温湿度の変化等の調査をしている。(青木繁夫)

4. 脱乾漆製伎楽面（8世紀）の修復

8世紀と考えられる脱乾漆製のこの面は、表面の造形、特に眼の辺から頂頭部にかけての表現に時代を感じさせない所がみられ、後世の何らかの手が加えられた可能性がある。又彩色も現状ではかなり保存がよいが、当初のものとは思われない不自然さがある。ただ貼り重ねられる麻布は粗く時代を感じさせ又面裏から伺える原型の造形も細部をかなりの所まで造り出していて、古様を思わせるところがある。

胎の保存状態はあまり良くなく、おそらく打撲と思われる大きな欠損孔が頂頭部にあり、又後頭部の面縁にも割損があって変形し、欠損部も見られる。頂頭部の欠損孔には表から紙が、裏からは布が貼られてふさがれているが、いずれも現状を損ねる拙劣な修理である。他には顎部面縁にも小欠損部が見られる。

修復は全体の古様を損なわない程度の復元修理を行った。

まず、後頭部の割損は、変形する部分をできるだけ元の位置に戻して、アクリル樹脂で接着し、一部欠損部には、人工木屎（モビリス+木粉）で整形し、古色づけを行った。顎の欠損部および頂頭部の欠損部には新たに造った脱乾漆片を形に切ってあてがい、アクリル樹脂で接着し表面は薄くサビをつけて仕上げ、古色づけを行った。（中里壽克）



写真1 脱乾漆製伎楽面